

---

写真資料に基づく西洋近世絵画における図像学的研究

---

(06610052)

平成6年度～平成8年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書

平成9年3月

研究代表者 木村三郎

(日本大学芸術学部教授)

《インド人に布教する聖フランシスコ・ザビエル》  
の図像についての考察

木村三郎

第Ⅰ章 ジャン・ル・クレール作《インド人に布教する聖フランシスコ・ザビエル》  
についての研究史

フランスのロレーヌ地方の画家であるジャン・ル・クレール(1587頃-1633)が描いたとされる《インド人に布教する聖フランシスコ・ザビエル》は、現在、ロレーヌ歴史博物館所蔵である(論文1:図31)。この作品に関する研究では、1992年に行われた展覧会カタログ「ジャック・カロの時代のロレーヌの美術」のなかのカタログ該当部分にある関連資料が指摘されているが、詳しい研究はまだ知られていない(1)。そうした現状を踏まえ、この論考では、この作品に関して図像学的観点から若干の新資料を紹介し、解釈上にも新しい視点を提案したいと考えている。

1990年に行われたシモン・ヴーエの展覧会カタログの中で、コレージュ・ド・フランス教授ジャック・テュイリエは、この作品と、素描《ターバンを巻いた3人の男たち》との関係を指摘している。この素描の人物頭部は、ル・クレールの作品の左手後景の3人の人物像に対応している(2)。一方で、ナンシー美術館研究員クロード・ペトリー女史は、ピエール・ローザンバール、ルーヴル美術館館長が指摘した、この素描とカルロ・サラチェーニ作《聖ライムンドゥス・ノンナートゥスの宣教》との関連性を強調している(3)。

第Ⅱ章 聖フランシスコ・ザビエルの生涯

a) 生涯

ところで、この研究のねらいは、こうした既に指摘されてきた問題ではなく、ザビエル自身が書いた書簡のこの作品への影響と、17世紀にフランス語に翻訳されたこの聖人の伝記のテキストとの関連から見た図像学的な分析にある。しかし、この件に関する詳しい分析に入る前に、先ず、ザビエルの生涯について若干基礎的な事実を確認しておきたいと思う。ザビエルはバスク地方の貴族の出で、1525年にはパリ大学に留学。ここで、1529年、イグナチウス・ロヨラと出会う。1534年、ロヨラを中心に創設された新修道会イエズス会に同志の一人として参加。ポルトガル国王の要請に応じて、1541年4月7日に、東インドに教皇使節として派遣

される(5)。

周知のごとく、ザビエルは137点の書簡を残している(6)。1542年秋に執筆したと判明する3点の書簡には、ザビエルがインドのゴアに到着し、そこで生活し布教したことが記されている。ところで、この3点の手紙は、その後フランス語に翻訳され、1545年に、パリのジャン・コルボン書店で販売されることとなる(7)。言いかえれば、このゴア滞在の書簡は、16世紀半ば以降、少なくともフランスのイエズス会の環境ではよく知られていたものなのである。

この書簡を開けてみると、ザビエルはリスボンから出発し、インドまでの航海中は、2人の同志ミセル・パウロとフランシスコ・デ・マンシラスと一緒にいたことがわかる(8)。ゴアには、1542年5月6日に到着し(9)、この地を伝道の拠点とした。この年の9月末にゴアを離れる(10)。セイロンに伝道し、日本にも滞在した。ゴアには1552年に戻り、すぐにまた、中国への新しい使節のために出発した。しかし、病に倒れ、中国にちかい島で死亡した(11)。

#### b) ザビエル伝各種

ザビエルの栄光は、極東の地に福音をもたらしたパイオニアであったという事実が存在している。反宗教改革時代における彼の影響力は甚大であり、その結果数多くの伝記が刊行された。1884年にカレヨンが刊行した「イエズス会研究参考文献集」(12)によれば、ル・クレールの作品の制作以前に、およそ20点の伝記を数えることができる。こうした伝記の中で、最も代表的なものが、オラーツィオ・トルセリーノが元来ラテン語で刊行したもので、それがイタリア語に1606年に訳され(14)、フランス語では、ダヴェーで1608年に刊行される(15)。

### 第三章 トルセリーノ著ザビエル伝(1608年のフランス語訳)とその挿し絵肖像版画の影響

a) ジャン・ル・クレール作《インド人に布教する聖フランシスコ・ザビエル》とボニファッツィオ作《ザビエルの肖像》

サラチェーニの作品とル・クレール作品との間の類縁関係は、特にその構図においては、すでに指摘した通りである。ところで、ル・クレールが、イエズス会の祭服をどのように研究しているかを考えてみたいと思う。たとえば、ル・クレールの作品が描かれる数年前の1617-19年頃、ルーベンスは、現在、ウィーン美術史美術館にある《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》(論文5: 図1)を描いている(16)。この作品のなかで、ルーベンスもイエズス会の祭服を研究したと想像されるが、ル・クレールの描いたザビエルの祭服との間には違いがある。たとえば、ル・クレールの場合、その描写にいつそう克明な部分の描写が認められるからである。一方で、ル・クレールの描いた祭服の特徴については、すでに

拙論で細かく分析してあるのでここで再論することは控えたいが(17)、要約すると、頭部の後光、着衣としてスターン、その上にアルバ、さらにその上にストラが確認できる。

ここで、やはり同じ拙論に引用してあるナターレ・ボニファッツィオ作《聖フランシスコ・ザビエル》(論文5:図11)の肖像を検討して見たいと思う(18)。この版面は、1608年のトルセリーノのザビエル伝仏訳に挿し絵となっているものである。ザビエルの頭部には後光があり、祭服にも、スターン、アルバ、そしてストラという今しがた見た3点を確認できる。すなわち、ル・クレールは、このボニファッツィオ作の版面を参照していたであろうことはほぼ間違いないと思われる。

## b) 文学上の典拠

この論考でさらに掘り下げて見たい論点は、ル・クレールの絵画と文学上の典拠との関係である。しかしながら、やはりすぐにその詳しい分析を試みる前に、この時代にインドで展開していた歴史上の事実を簡単に確認しておきたいと思う。インドでは、15世紀末から16世紀初めにかけて、ムスリムの五つの王国が成立し、ムスリム五王国と呼ばれる。1498年に、インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマがカリカットに到着し、1500年からは取引を行った。しかしその後の展開は、決して平和な手段でなされたものではなく、1510年に、ピージャプル王国の支配下にあったゴアの町が、ポルトガルの総督アルフォンソ・アルブケルケの手に落ちた(19)。こうした歴史的な事実関係は、ジョアン・デ・パロスの「アジア史」の中に記述されている(20)。

## i) 仏訳された典拠

ここで、1608年に仏訳されたトルセリーノのザビエル伝テキストを引用してみようと思う。第2書、第1章には、以下のように、ザビエルがインドに、1542年5月6日に到着した前後の様子を記している(21)。

「インドの首都はゴアであるが、この町は、同じ名称を持つ島の中にある。・・・ここにはまた、ポルトガルでたいへん有名なインド副王がいて、大司教座もある(p. 141)・・・。・・・ポルトガル人が、ゴアとその周辺の地域を支配し、イスラムの圧制を追放し、代わりに自ら先ずインド人と共に暮らし、やがてキリスト教の信仰へ勧誘するという、イエスによる緩やかな統治を持ち込んだのもこの頃のことである(p. 142)・・・。ザビエルは、我々の聖なる信仰の神秘の力で、またポルトガル語を用いながら、何人かの子供たちを改宗させ、洗礼させ、また教育した。そして彼らにはその後、土地の人たちを改宗させるためにの通訳として働いてもらった。そしてより重要な計画を構想し、インド人のために学校をつくった。こうして改宗させるために必要なことはすべて行ったのである。ポルト

ガル人が住む他の村だけでなく、ゴアの町自体のなかにも、異教の、またはイスラムの迷信が強く残っていたからである。」(p.143)(22)

## ii) 分析

ここで、このテキストとの関連で、ル・クレールの作品の若干の分析を加えたいと思う。先ず、「ポルトガル人が住む他の村だけでなく、ゴアの町自体のなかにも、異教の、またはイスラムの迷信が強く残っていたからである」という記述に注目したい。ザビエルは、インド人だけでなく、イスラムの人々にも布教を試みていたからである。この2点は、ル・クレールと、後に分析するクロード・シャルルの作品(論文1:図32)を眺める上で極めて重要な点となるところである。

ル・クレールの作品の中では、ターバンを巻いたイスラム人たちはザビエルのそばにいて、いかにもザビエルが彼ら圧政を異教から解放しようとしているかがわかる。

第2に、ザビエルの右手後ろには、スターンを着用した一人の西洋風の人物がいる。この人物は、1542年の手紙に記されている、ザビエルがリスボンから一緒にインドにやって来た同志二人、ミセル・パウロとフランシスコ・デ・マンシラスのうちの一人と解釈することも可能であろう(23)。

## 第IV章 ザビエルの列聖

ザビエルは1619年6月7日に列福され(24)、1622年3月12日に教皇グレゴリオ15世から列聖されている(25)。この時期にパリで列聖を祝う行事が行われ、画家プッサンが数点の作品を描いていたことも知られている(26)。

また、すでに筆者の先行研究ですでに指摘してあるが、ルーベンスが描いた《聖フランシスコ・ザビエルの奇跡》の文学上の典拠にも、トルセリーノの伝記の存在が重要であった(27)。さらに、プッサンがザビエルを描いたもう1点の《日本の鹿兒島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル》(ルーヴル美術館蔵)(論文5:図3)の典拠も同じように、この伝記の中に入った(28)。いかにこの伝記がバロック期の画家の世界で重要視されていたかがわかるといえよう(29)。

## 第V章 クロード・シャルル作《聖フランシスコ・ザビエルの布教》について

ところで、ザビエルのインドにおける布教に関しては、我々は、もう1点のロレーヌの画家の作品を認知している。クロード・シャルル(1661-1747)作《聖フランシスコ・ザビエルの布教》がその作品である(30)。

19世紀末の研究者であるパデルは、このロレーヌの18世紀の画家の作品について次のように記録している。シャルルは、「ナンシーの聖堂のために多く作品

の制作を行った。その制作は、市などの公的な資金や、個人の負担でまかなわれたりした。特に、イエズス会修練院のなかの〈インドの使徒〉のために捧げられた礼拝堂を装飾したことが重要である。《福音を伝える聖フランシスコ・ザビエル》(*Saint François-Xavier prêchant l'Évangile*)と、《インド人に洗礼を施す聖フランシスコ・ザビエル》(*Saint François-Xavier baptisant les Indiens*)の2点は、彼の画家としての名声を高めた。これらは、高さ3メートルにもなり、礼拝堂で対面をなしている」(31)。

筆者の見解によれば、この *Saint François-Xavier annonçant l'Évangile aux Indiens*が、現在、ナンシーのサン・ニコラウス聖堂に存在する作品(論文1: 図32)であると考えられる。ザビエルは右手を高く掲げ、磔刑のキリスト像を手にしている。画面左手には、5人のインド人がいて、その中の一人は女性で、頭に色彩のあるターバンを巻き座って振り向いている。他方で、この画面の右手には、ペトリー女史の指摘にもあるように、一人だけ他とは際だって異なった印象の優雅な服装の身をまとった男性が立っている(32)。

ここで再度図像学上の問題を検証してみようと思う。このシャルルの作品が描かれた18世紀には、ル・クレールのザビエルの作品は、ナンシーに所在していた。従って、シャルルがこの作品を参照したことは十分に想定できるといえよう(33)。その際に恐らくシャルルも、ザビエル伝、特にトルセリーノのテキストは参照していたものと思われる。たとえば、先にも引用した、ザビエルは「改宗させるために必要なことはすべて行ったのである。ポルトガル人が住む他の村だけでなく、ゴアの町自体のなかにも、異教の、またはイスラムの迷信が強く残っていたからである」という一節を想起すると(34)、今指摘した前景の人物たちの根拠が理解できそうである(35)。

こうした分析を試みしてみると、トルセリーノによる一節は、この書物の巻頭の挿し絵ともども、ル・クレール、あるいはシャルルの制作上の着想源として大きな意味を持っていたことは確実のようである。

## 註

この論文の執筆にあたっては、コレージュ・ド・フランス教授 Jacques THUILLIER, ルーヴル美術館館長 Pierre ROSENBERG, 西洋美術館館長高階秀爾, 美術史研究者René FAILLE, ナンシー美術館研究員 Claude PETRY, そして共立女子大学のErika PESCHARD-ERLIH, の各氏のご指導を得た。なお、当論文は、KIMURA (S.), 《*Saint François-Xavier prêchant les Indiens, quelques aspects iconographiques*》, *Georges de La Tour ou la nuit traversée*, Actes du colloque organisé à Vic-sur-Seille (1993), 1994, Serpenoise, p. 133-143, を邦訳し、修正加筆したものである。

1. DOM CALMET (A.), 《CLERC (Jean le)》, *Bibliothèque Lorraine, Histoire des*

*hommes illustres*, 1751, A. Leseure, Nancy, t. IV, p. 286; DURIVAL L'ainé, *Description de la Lorraine et du Barrois*, 1778-83, 4 vol., t. II (1779), p. 16; BADEL (E.), 《L'église Saint-Nicolas de Nancy (Ses objets d'art. Ses Peintures murales)》, *La Lorraine-Artiste*, 1890, 8, no. 18, Dimanche 14 septembre, p. 294; PETRY (C.), 《Jean Le Clerc》, in cat. NANCY: Expo. *L'art en Lorraine au temps de Jacques Callot*, 1992, Musée des Beaux-Arts, 13/6-14/9, no. 63, p. 226-227, 色彩図版, bibl..

この作品の来歴に関しては、DURIVAL (1779, *op. cit.*, p. 16) は、1610年にナンシーに建立された《l'Eglise... du collège》のなかにある作品に関して、《Jean le Clerc... a peint... le S. François Xavier & la Vierge à leurs autels》と記録している。18世紀半ばまでは、*S. François Xavier* と *sainte Vierge* の2点の作品は、まだ l'Eglise des Jésuites du Collègeに存在していた (CALMET, 1751, *op. cit.* p. 285, no. 3, no. 4)。19世紀には、BADELによれば (1890, p. 294, no. 4)、*Saint François-Xavier baptisant les Indiens* は、クロード・シャルル作の *Saint François-Xavier* とともに、l'Eglise Saint-Nicolas de Nancyに存在していた。1970年に、ロレーヌ歴史博物館に、les soeurs de Saint-Charlesから寄贈された (PETRY, 1992, *op. cit.*, p. 226)。

ジャン・ル・クレールの生涯に関しては、PETRY, 1992, *op. cit.*, p. 405-408を参照。制作年代に関しては、Jean Le ClercとJean Bonnetの間に交わされた1632年2月11日の契約書が参考になるとされる。しかし、そこに記録された作品の寸法に問題が指摘されている (p. 407)。

2. THUILLIER (J.), *Vouet*, 1990-91, in cat. p. 92. また、PETRY, 1992, *op. cit.*, no. 62, p. 225, r. を参照。ただし、PETRYが指摘しているように、この素描が、ル・クレールの作品のための準備段階の素描なのか、あるいは、完成作から描かれた素描なのかは判別しがたい。

3. PETRY, 1992, *op. cit.*, p. 226 (1988年以降になされた P. Rosenbergによる指摘に基づく)。しかし、クロード・シャルル作の《聖フランシスコ・ザビエルの宣教》との関連については、フランソワ・パリゼが、1948年刊行の *Georges de La Tour* (Henri Laurens, p. 119) のなかですでに指摘している。

サラチエーニについては、BELLORI (G. P.), *Le vite de' pittori, scultori e architetti moderni*, 1672, Rome, p. 224. 実際に参照したものは、BOREA版, 1976, Einaudi, p. 234, 註6 (Ora nella chiesa dei Padri Mercedari a Torre Gaia); OTTANI CAVINA (A.), *Saraceni*, 1968, Spagno; NICOLSON (B.), *The Internatinal Caravaggesque Movement*, Phaidon, 1979, p. 88 (NICOLSON, B., *Caravaggism in Europe*, 1989, Allemandi, 3 vol.; t. I, p. 172, no. 168, r.). この画家とフランスとの関係については、CUZIN (J. P.) et ROSENBERG (P.), 《Saraceni et la France. A propos du don par les Amis du Louvre de la Naissance de la Vierge》, *Revue du Louvre*, 1978, 3, p. 186-196.

4. SCHURHAMMER S. J. (G.), *Franz Xavier, Sein Leben und sein Zeit*, 1955, Freiburg, Herder, 2 vol. . 実際の引用は、以下の英訳版による。 *Francis Xavier, His Life, His Time*, 1982, 4 vol., 1973-82, The Jesuit Historical Institute, 英訳は、J. COSTELLOE, S. J. . また、MOURRE (M.), *Dictionnaire encyclopédique d'histoire*, Bordas, 1978, p. 1882, を参照。

5. *Ibid.* .

6. SCHURHAMMER S. J. ( G. ) et WICKI S. J. ( J. ), *Epistolae S. Francisci Xaverii aliaque eius scripta*, Monumenta Historica Societatis Jesus, 1944-1945. 邦訳としては、「聖フランシスコ・ザビエル全書簡」平凡社, 翻訳: 河野純徳, 1985, p. iv.

7. 次の資料を、フランス国立図書館で閲覧することができる。 François-XAVIER, *Copie dune lettre missive envoyee des Indes, par monsieur maistre Francois xavier... 1545; Deux epistres faistes sur le voyage des Indes, l'une en la cite de Goa le 20. de septembre mil cinq quarante deux, & lautre escripte de Tatucurim le 28. octobre mil cinq cens quaranta deux, enuoiees par maistre Francois xavier... a monsieur Egnace son preuost, & a ses confreres... 1545.* Jehan Corbon, Paris (Bibliothèque Nationale de France, H. 10960, Mf-m-16473).

8. 1542年9月20日, ゴアから出された書簡15 (河野, 1985, p. 80) 。ただし、仏訳のテキスト、 *Deux epistres, (Aa ij), lettres... le 20 de septembre, lan de grace 1542*では、《mesire Francoys de mansilla & mesire Polmes》と記述されている。

9. *Ibid.* .

10. SCHURHAMMER S. J. (G.), (COSTELLOE), t. II (1977), Chapter V, p. 200-267.

11. *Ibid.* .

12. CARAYON (A.), *Bibliographie historique de la Compagnie de Jésus ou catalogue des ouvrages relatifs à l'histoire des jésuites depuis leur origine jusqu'à nos jours*, 1864 (Slatkine, 1970), p. 366-368, no. 2691-2712.

13. *Horatti Tvrsellini e Societate Iesv. de vita Francisci Zaveri...*, 1594, Romae, Ex Typographia Gabina, 復刻版 *Classica Japonica, Facsimile Series*.

Section 2. Kirishitan Materials. 5 Facsimile.

14. TORSELLINO (O.), *Vita del B. Francesco Saverio, Il primo della Compagnia di Giesv. . .*, 伊訳 SERUGLIENI (L.), 1606, Milan, Bordone & Lacarni.
15. TORSELLINO (O.), *La vie du bien-heureux Pere Francois Xavier, premier de la Compagnie de Iesvs. qui a porté l'evangile aux Indes, & au Japon, Diuisée en six liures par H.T. de la Compagnie de Iesvs. & traduite en françois par vn Pere de la mesme Compagnie*, 1608, A Davay, Baltazar Bellere. (仏訳 P. Martin Christophe, CARAYON, 1864, op. cit., p. 366, no. 2698 参照).
16. BELLORI, 1672, ;BOREA版, 1976, p. 243 註6. 関連した他の資料に関しては、拙論「ニコラ・プッサン作『日本の鹿兒島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル』の典拠について」『ジャポネズリー研究学会会報』1985, 5, p. 17, 註36-37. 若干改訂を施してあるフランス語版論文では、KIMURA (S.), 《La source écrite du Miracle de saint François-Xavier de Poussin》, *Revue du Louvre*, 1988, 38, 5-6, p. 398, note 36-38.
17. 拙論「《聖フランシスコ・ザビエル像》の図像展開と17世紀初頭におけるその作品目録」『日本大学芸術学部紀要』1996年、第26号.
18. *Ibid.*, カタログ, no. 11.
19. *Grand Dictionnaire Encyclopédique Larousse* (以後略して *GDEL*), Larousse, t. VIII, 1983, p. 5527.
20. BARROS (J. de), *Decadas (XII) da Asia de Joam de Barros y Dingo do Cunto dos feitos que os Portugueses fizerao no descobrimeto et conquista dos mares e terras do Oriente (depois do anno do 1414 ate o do 1600)*, 1552-1673, Lisbonne; 今回は、以下の邦訳を参照した。パロス (ジョアン・デ), 「アジア史」岩波書店、大航海時代叢書、全2巻、第Ⅱ期, 2 (1980)-3 (1981)、邦訳：生田滋・池上岑夫、注：生田滋, 1981.
21. TORSELLINO, 1608, *op. cit.*, Livre second, Chaop. I, p. 141-143.

“La capitale des Indes est Goa, ville située en vne Isle qui porte mesme nom . . . C'est aussi le siege de l'Archeuesque & du Viceroy des Indes fort renommée par les Portugais. . . . (p. 141) . . . : ce fut lors que les Portugais s'estans faict maistres de Goa & des autres places

voisines, osterent le ioug tyrannique des Sarrasins, & mirent au lieu le fardeau leger & suave de Iesus-Christ sur les espauls des Indois. car ils commencerent premieremēt à cohabiter avec eux, & puis les attirerent doucement à la religion Chrestienne (p. 142)..... Iceiuy donc aiant converty, baptisé & instruit es misteres de notre sainte foy, & en la langue Portuguoise quelques enfants, il s'en seruoit par apres d'intrepretes pour vaquer à la reduction des autres gentils..... il meditoit choses pluts grande: & aiant desja institué vu seminaire d'Indiens : il s'emploioit du tout à les endoctriner... les superstitions payennes & sarrasines resterent en vigueur, non seulemet aux autres bourgades ou habitoient les Portuguais, mais en ville mesme de Goa" (p. 143).

22. なお、邦訳には、上記の、デ・パロス「アジア史」2, 第5部, p. 393, 他を参照した。一般的な資料としては、生田滋『“黄金”のゴア・・・港市の混合文化』「朝日百科・世界の歴史」1991, 第7巻, p. D-439-443.

23. トルセリーノの伝記では、もう一人、次の名前を確認できる。《Euesque de Goa & de toutes les Indes..... Ian d'Albuquerque religieux de l'ordre saint François》(p. 142)。ザビエルの書簡 (SCHURHAMMER, *Francis Xavier, op. cit.*, t. I:1977, p. 720) と、次の展覧会カタログ「ポルトガルと南蛮文化展・めざせ、東方の国々」(セゾン美術館、静岡県立美術館、他、1993. 4. 8-10. 11, p. 228, カタログ執筆 M. H. MENDES PINTO, 坂本満、他) のなかの研究によれば (M. H. M. PINTO)、フランシスコ会はイエズス会よりも早くにインドの地に着いていた。しかし、フランシスコ会の僧衣は、たとえば、《恍惚》と題されたル・クレールの他の作品 (Eglise paroissale de Bouxières-aux-Dames蔵) に描かれていて、その比較からも同系統のものだとはいえない (NANCY, 1992, no. 66, p. 232-4, C. PETRY)。

24. 1619, 6. 7; SCHURHAMMER S. J. (G.), *Die Zeitgenössischen Quellen zur Geschichte Portugiesisch-Asiens und seiner Nachbarländer...*, 1962, Institutum Historicum S. I., p. 471, no. 6223.

25. 1622. 12. 3, *RELATIONE SOMMARIA DEL SOLENNE APPARATO...*, SCHURHAMMER S. J. (G.), *Die Zeitgenössischen Quellen...*, 1962, *ibid.*, p. 473, no. 6234. からの引用。ザビエルの列聖に関しては、拙論 (『ジャポネズリー研究学会会報』1985, 5, p. 17, 註, 38-39bis) 参照のこと。

26. BELLORI, 1672, *op. cit.*, p. 410, 1976 BOREA版, p. 424. 拙論、木村, 1985, p. 17-18, 註 40-43.

27. SMITH (G.), 《Rubens' Altargewälde des hl. Ignatius von Loyola und des

hl. Frans Xavier für die Jesuitenkirche in Antwerpen》, *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien*, 1969, 65 (XXIX), p. 39-60, r.; 木村, 1985, p. 17.

28. 木村, 1985.

29. この問題は、わが国にも大きな影響を与えているが、上記の拙論, 1996を参照のこと。

30. シャルルの生涯に関しては、MARIETTE, *Abecedario*, 1851-53, t. I, p. 360 ; VOLLMER (H.), 《Charles (Claude)》, *Allgemeines Lexikon der Bildenden Künstler*, (Thieme), 1911-12, t. V, p. 394-395.

Pariset以来の研究者は、この作品を、ジャン・ル・クレール作と考えてきた。PARISET, *La Tour*, 1948, *op. cit.*, p. 119 (Jean Le Clerc, 1632). PARISET (F.), 《Note sur Jean Le Clerc》, *La Revue des Arts*, 1958, 8, 3-4, p. 67-71, r. fig. 1 (Jean LE CLERC); ROME: Expo. *Claude Lorrain e i pittori lorennesi in Italia nel XVII secolo*, De Luca, 1982, 4-3, Accademia di Francia a Roma, cat. par THUILLIER (J.), p. 74-75, r. (Jean Le Clerc, 1632); WRIGHT (C.), *The French Painters of the Seventeenth Century*, Orbis, 1985, p. 207; NANCY, 1992 (PETRY), in cat. no. 67, p. 234-235, 色彩図版 (Jean Le Clerc ou Claude Charles?).

一方で、BADELが述べているように、19世紀には、Claude Charlesの作品であるとした記録がある (1890, *op. cit.*, p. 279-297, 特にp. 296)。NICOLSON (1979, *op. cit.*, p. 67, ed. 1989, t. I, p. 137) は、以下のように記録している。《One wretched late copy known: Eglise de la outre, Mirecourt (Vosges). 193 × 130. Anonymous. Not caravaggesque》。制作年については、PETRY (1992) は、「1731年2月17日に、イエズス会修道院の中のザビエルに捧げられた礼拝堂のために、クロード・シャルルが注文を受けたいくつかの絵画のなかの・・・当時はたいへん評判であった・・・一つの作品ではないか。」と推定している。(cf. 1990, G. Voreaux, *Thèse de doctorat*, Nancy: 未確認)。

31. BADEL (1890, *op. cit.*, p. 296) によれば、対画 *Saint François-Xavier baptisant les Indiens* は、1790年に、《Congrégation autorisée des soeurs de Saint-Charles》に与えられ、1890年当時も所有されていたされる。VOLLMER (H.), *Allgemeines Lexikon*, 1911-12, *op. cit.*, p. 394, にも引用されている。

32. NANCY, 1992, (PETRY), in cat. no. 67.

33. FELIBIENは、1685年にル・クレールの作品について次のように書いている。《on voit à Nancy plusieurs tableaux de sa façon, en particulièrement dans l'Eglise des Jesuites》(*Entretiens sur les vies et sur les*

*oeuvres des plus excellents peintres anciens et modernes*, IVe Partie, 1685. Paris, S. Marbre-Cramoisy, p. 73-74, 復刻版 Minkoff, 1972). 脚注の1に記したように、18世紀の半ばには、*S. Francois Xavier*と *sainte Vierge*が *Eglise des Jésuites du Collège*に存在していた。

34. 註22参照。

35. 作品前景右手にいる人物については、PARISET は、ラ・トゥールの縁者の一人でル・クレールの弟子である、Louis de Bermand を想定している (1958, *ibid.*, p. 68-9, 同じく PARISET, *La Tour*, 1948, p. 119)。しかし、当論考の流れからいえば、当然該当しえないこととなる。

筆者はこの人物について、いささか異なった想像をしてみたいと考えている。すなわち、この際だって特殊な印象を見せる人物は、先に言及したアルブケルケ (1453-1515) その人を示しているのではないかという仮説である (論文1: 図33)。1509年、彼は、インドの副王の地位をフランシスコ・デ・アルメイダから引継いだ (*GDEL*, t. I., 1982, p. 256)。1510年には、全てのイスラム人を追放した後、ゴアを占領し、イスラムの商業取引きを失墜させ、リスボンの王国に胡椒と香辛料貿易の利益をもたらした (M. M.-L. 《ALBUQUERQUE (Alfonse de)》, *Encyclopaedia Universalis*, t. I, 1968, p. 569-570, 参照)。しかし、アルフォンソ自身は、ザビエル到着27年前の1515年にゴアで死去している。彼の肖像に関しては、色彩図版が、M. PINTOS, 1993, in cat., *op. cit.*, no. 63, p. 97-98にある。

こうした歴史的な関係を確認した上で、この18世紀ロレーヌの画家シャルルが、この著名な征服者のことを認知していたことは、作品の注文主から教えられていたことも含めて、全く不可能とはいえないであろう。その一つの理由は、アルフォンソの息子の Brás Alfonso de ALBUQUERQUE (1500-1580) が、父親の生涯を、記録に基づいて、1557年に *Commentaires* (未確認) として執筆しているからである (*GDEL*, *ibid.*)。